

第2期教育広報専門委員会のスタートにあたって

教育広報専門委員会委員長・教養部 川口 節雄
kawaguti@cc.hirosaki-u.ac.jp

1992年（平成4年）にセンター広報誌HIROINを創刊して5年余が経った。広報誌HIROINは「弘前大学情報処理センターにおいて現在どのようなサービスが受けられるか、情報処理センター関連委員会の活動、情報処理センター利用状況などを述べるとともに、弘前大学情報処理センターにおけるこれらの状況や活動を理解していただくことを目的に本広報誌を発刊した」という吉岡センター長の言葉に示されたように、センターの紹介、研究解説、プログラムの開発などその時々話題を重点に取り上げ今日に至った。広報誌としての役割を一応はたしてきたと思うが、引き続き第2期の委員会を引き受けるにあたり、思うところを述べてみたい。

近年のコンピュータの利用を振り返ってみる。1985年末に情報処理センターが汎用大型計算機ACOSを中心に専用端末機の実習室を備えて発足した翌年、教養部は実習を伴う授業として情報科学を手探り状態でスタートさせた。1991年（平成3年）に計算機システムが更新され、新たに教養部に情報処理実習室が設置され、情報処理教育が組織的に開始された。コンピュータは汎用大型計算機で計算中心であったため、授業もプログラミングが中心でキャラクター・ディスプレイであった。計算機はまだ一部の利用者の関心でしかなかった。それが大きく様変わりしたのは、1994年4月のネットワークHIROINの更新、同年総合情報処理センターの発足で、イーサネットが全学に導入され飛躍的にネットワークの性能が向上し、X端末と高性能パーソナル・コンピュータ端末が従来型の文字情報のみから画像情報の扱いを可能にした時点である。1995年度には情報処理教育が全学必修の共通教育科目としてスタートした。日本で最初のWWWサーバが高エネルギー物理学研究所で立ち上がったのが1992年9月、世の中に広がり始めたのが1993年後半です。弘前大学のインターネットへの対応は極めて順調に進んだ。

コンピュータが電気洗濯機や自動炊飯器に組み込まれ、便利な電化製品が当たり前になって以来久しい。今日の情報化社会の到来は、電話をかけるようにe-mailを使い、ホットなニュースを知るためにインターネットに入り込んだりが日常活動となってきた。とりわけ新聞やテレビのもつ情報の一方向伝達に対して、ネットワークが情報発信を可能にし情報の双方向伝達が実現したことである。コンピュータが計算機械としてのみならず情報の集積と発信の中心としての役割を担うものとなった。誰もがコンピュータ無しでは済まされなくなりつつある。エキスパートだけがコンピュータを使う時代は過ぎ去った。思うに、これからのセンターの役割は、誰もがコンピュータを利用できるように、有用なアプリケーションの導入開発や、CONVEXなど高性能計算機の利用促進、特色ある情報のデータベース化に向けての指導や図書館情報などのよりよい検索システムの構築などに加えて、コンピュータを意識しなくてもよい環境の構築にあるのではと思う。利用者の数に比して極めて少ないスタッフで大変とは思いますがセンターの一層の努力に期待したい。

教育広報専門委員会は親しみやすいセンターを目指して、センターの紹介と共に、利用者の声を汲み上げる努力を忘れてはならないと考えている。センターが一部の利用者にとどまらず、全ての教職員・学生に満足して利用していただくためには、利用者の積極的な投稿やご意見・要望など情報の提供をお願いしたい。それがあってはじめて、独りよがりでないセンター広報誌が出来る。ご協力をお願いします。